

石原色覚検査表Ⅱ

1933年、第14回国際眼科学会(マドリド、スペイン)において石原色覚検査表、スチリング(Stilling)色覚検査表およびナーゲル(Nagel)アノマロスコープが色覚異常の標準検査法として推奨された。特に、石原色覚検査表は臨床その他の場所で容易に使用でき、かつ他の同様な仮性同色表と比較して、検査としての特異度(正常色覚を色覚異常と判定する偽陽性度が低い)と感度(色覚異常を正常色覚として判定する偽陰性度が低い)とがともに高いことが標準的検査表として推奨された最大の根拠である。

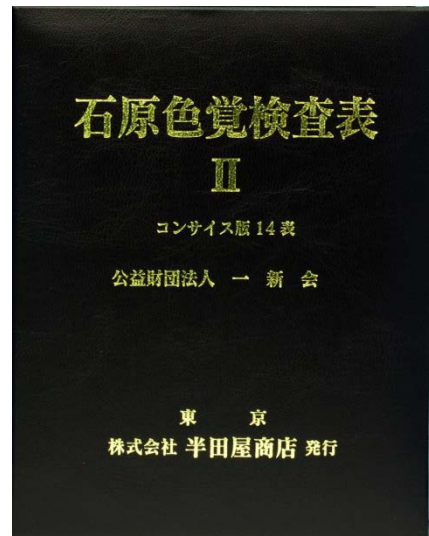
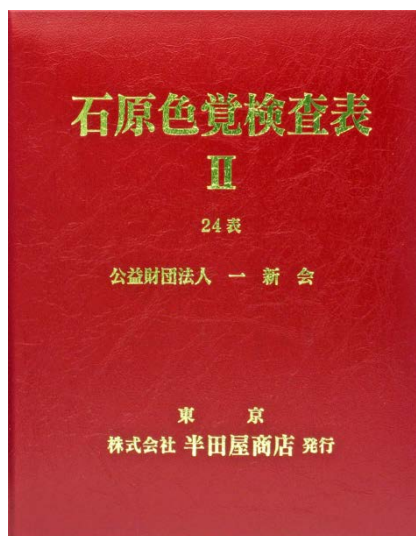
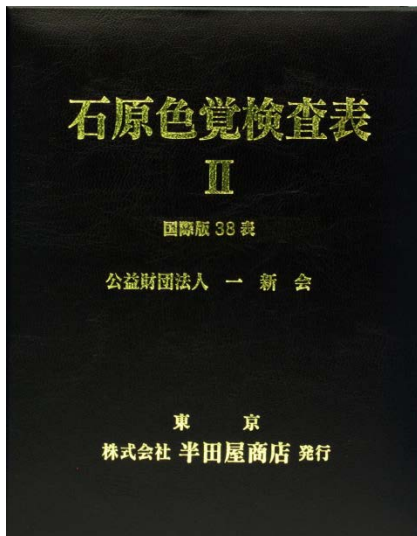
石原色覚検査表は1916年に東京大学医学部眼科学講座 石原 忍教授によって考案された。当初は石原色盲検査表と命名され、16表で構成されていた。その後、改良ならびに表数が増加され、1936年に32表、1951年に38表となった。

財団法人一新会(現:公益財団法人一新会)は色覚検査表の品質の維持および改良ならびに色覚異常の検査表に関する研究支援を目的に石原色覚検査表の版権を基に1961年に設立された。大熊篤二をはじめとする多くの卓越した研究者が財団法人の目的に従っての様々な色覚の研究に参加、尽力した。1980年に大熊教授は独自の仮性同色表を創作し、新色覚異常検査表として発表した。この検査表の色覚異常の検査に関する特異度と感度は石原色覚検査表と同様の成績が得られている。今回、財団法人としては石原色覚検査表および新色覚異常検査表の中から検査能力に特に優れた検査表を基に新たな石原色覚検査表Ⅱを編纂、上梓した。

公益財団法人

一新会

※石原色覚検査表Ⅱ 序文より、一部抜粋いたしました



平成25年3月 発行 「石原色覚検査表Ⅱ」

HP-1205A 石原色覚検査表Ⅱ 国際版38表
 HP-1205B 石原色覚検査表Ⅱ 24表
 HP-1205C 石原色覚検査表Ⅱ コンサイズ版14表

『石原色覚検査表Ⅱ』は数字表(石原表)と環状表(大熊表)の構成となっており、国際版38表は数字表・環状表・曲線表、24表とコンサイズ版14表は数字表・環状表となっております。

※24表・コンサイズ版14表には誤読率を勘案し曲線表を外しております。

曲線表:「数字の読めない被験者の場合、曲線表を使用する。この場合、これらの表は色覚異常の疑いとどめ、異常の有無の判定には数字の読める状態または環状表にて判定を行う(石原色覚検査表Ⅱ「検査の実際と判定」から抜粋)

